

ヘンリエッテ・ローラント・ホルストにおける マルクス主義との対決¹⁾

内 田 博

藤女子短期大学 生活学科

はじめに

ヘンリエッテ・ローラント・ホルスト＝ファン・デル・スハルク(1869-1952)は、このくにでは、ヘルマン・ホルテルやアントン・パネクークとともにオランダ・マルクス主義の代表者として知られている。しかし、オランダ語圏を中心とした諸研究が明らかにしているように、彼女は1920年代の末にはマルクス主義批判を開始して、一種の宗教的社会主義の形成に向かった。⁽¹⁾

この宗教的社会主義は、特定の宗派の教義体系や信仰共同体に社会主義の根拠を求めるというものではない。ここでの宗教は、彼女が、形成途上にあったユング心理学から学んだ概念であった。⁽²⁾ そのユング心理学によれば、世界の構造とそのなかでの自分の位置を示してくれる地図を求め、生のエネルギーを方向づける献身の対象を求める志向—あらゆる不安や疑いをともなう孤立した自分の存在を超越して、生に意味を与えてくれるような絶対的な価値を求める志向—が、無意識の深層に発する心の働きとして、人間に本来的に生じる。ローラント・ホルストは、このような志向、人間の内外で働く諸力とこの志向との作用によって形成される地図、方向づけの枠組みや価値を宗教的なものと捉えた。

ローラント・ホルストにとっては、経済的諸力ではなくて、それを一作用として形成されるこの「宗教的」なものが、人間行動の最も強力な動因であった。彼女は、この意味での宗教のとる方向を、生命愛に発する解放的な方向と生命破壊に向かう方向とに大別し、前者を促進して生活過程に定着させる過

程そのものとして、宗教的社会主義を構想した。ここでは、資本主義対社会主義、ブルジョア対プロレタリアートといった既存の対抗軸は、行為と生活の様式やそれらを取り巻く制度的諸関係を評価する基軸ではもはやない。先行し競合する社会とその思想は、上述の二方向のいずれを強化するのかという視角から審問に付される。その中でローラント・ホルストは、マルクス主義と対決するとともに、キリスト教平和思想の伝統、キリスト教社会主義やキリスト教アナキズムの運動、トルストイやガンジーの思想を再評価するに至ったのである。

本稿では、ローラント・ホルストのこのような晩年の営みのなかからマルクス主義との対決という論点を取りだして、その思想的な意味を検討する。そのために、まず、マルクス主義との対決が思想的に準備されていたマルクス主義時代の彼女の社会主義思想を一瞥し、ついで、マルクス主義との対決の様相を明らかにする。

註

- (1) ローラント・ホルストの宗教的社会主義を扱った文献としては以下のものがある。Proost, K. F., *Henriette Roland Holst in haar strijd om gemeenschap*, Arnhem 1937; Antonissen, R., *Herman Gorter en Henriette Roland Holst*, Utrecht, Antwerpen 1946 (2de druk, Utrecht 1979); Praag, J. P. van, *Henriette Roland Holst. Wezen en werk*, Amsterdam 1946; Jochheim, G., *Antimilitaristische Aktionstheorie, soziale Revolution und soziale Verteidigung*, Assen, Amsterdam, Frankfurt a. M. 1977.

- (2) Vgl. Antonissen, a.w., blz. 471-474.

1) HIROSHI UCHIDA: De kritieke uiteenzetting met Marxisme bij Henriette Roland Holst.

第1節 ローラント・ホルストにおける社会主義とマルクス主義

第1項 美的・倫理的社会主義

オランダは、後背地であるドイツの工業化の恩恵を受けて、また、1849年以來の自由主義政權による近代化政策と産業基盤整備を経て、1870年頃から本格的な工業化を開始し、第一次大戦のなかばまで、全体としては急激な経済発展と経済成長を遂げた。しかしその道のりは、けっして平坦なものではなかった。とくに80年代から90年代前半にかけては激動期であり、農業恐慌や農業不況にともなう飢餓、何回かの恐慌による大量失業の発生、劣悪な生活条件によって促進されたインフルエンザの大流行などが、社会問題を激化させて多様な労働運動や社会主義運動を生み出した。⁽¹⁾ そのなかで、アナキズムに傾斜した社会民主同盟から離れたマルクス主義者が、1894年にネーデルラント社会民主労働党(SDAP)を結成した。

世紀転換期のSDAPは、政党規模に比べて不釣り合いなほどの多くの知識人や芸術家を引きつけたが⁽²⁾、ローラント・ホルストもそうした芸術家のひとりであった。彼女は、画家でウィリアム・モリスに心酔していた夫のリハルト、詩人で友人のホルテルと一緒に、1897年にSDAPに入党し、マルクス主義者としての歩みを開始した。『自伝』(1949)によれば、その最大のきっかけとなったのは、第一に、友人でジャーナリストのP.L. タークの文章などによって、資本と労働の対立に眼を開かれたことであり、第二に、ホルテルの勧めで『資本論』を読んだことであった。⁽³⁾ しかし、タークが1890年のフリースラントの飢えと貧困に強い印象をうけて、社会問題に対する直接的な関心からSDAPに入党(1899)したのに対して⁽⁴⁾、ローラント・ホルストが社会主義に向かった動機は、詩人としての美的・倫理的な関心に発するものであった。

のちに、『ネーデルラントにおける資本と労働』の第1部(1902)で、オランダの芸術状況一般を論じることかたちで述べているように、ローラント・ホルストにとってオランダの工業化は、18世紀から続く文化と社会の沈滞を破り、眠り込んでいた美的感性を覚醒させる好機ではあった。しかし、工業化にともなう社会問題の発生や自然破壊、都市化による景観破壊などが示すように、「芸術家を取り巻いてい

て、気づかれぬうちに影響を与える社会的な世界は、愛すべきものでも美しいものでもなかった。芸術家はそこを離れて、自分自身の心や自然へと逃れた。……自分を取り巻く資本主義社会を、その粗野さ、反美的性格、低俗な物質主義を…耐えてきた芸術家たちにも、自分の感性と社会とをつなぐ糸がどこにあるのか分からなかった。」⁽⁵⁾

この事情はローラント・ホルストにも無縁ではなかった。彼女は1893年に詩人としてデビューし、1895年にははじめての作品集『ソネットと詩』を発表しているが、それを分析したアントニッセンによれば、『ソネットと詩』は、個人主義的ではないが、強烈に個性を志向する作品であった。⁽⁶⁾ それは、自分の心から発する衝動に耳を傾け、「自分の固有の本質を発見し…自分の生涯を支配すべき不変の生の価値を求め」ようとするものであった。⁽⁷⁾ 時代と社会からあえて自分自身を切断して、個性を追求するなかで見出された価値が、アントニッセンによれば愛であった。「生の価値としての愛、『存在するあらゆるものへの愛』、『自我とその欲望に思い煩わなくてもよいこと』—これらすべてが、ヘンリエッテ・ファン・デル・スハルクには自己の生の喜びと感じられたのであり、これがまた、獲得した知識がひとのためになることを示して、その時代のひとびとを導きたいという内的な衝動を育んだ。共同体的に感じ、共同体を求める心の衝動が、彼女の最も強い衝動であった。それが、彼女に喜びの感情を与えたのである。」⁽⁸⁾

個性の追求から生じた共同性への志向が、彼女をふたたび社会に結びつけることになる。しかし、そうした価値を贈るべき社会は、もはや資本主義社会ではなかった。SDAPに入党した当時を振り返って、ローラント・ホルストは『自伝』にこう書いている。「資本主義は、喜びのない強いられた生活を、無知と墮落を広範な大衆の運命とするだけではない。—それは世界を醜いものに変え、古い都市と自然の美を殺し、それなしには芸術が存在しえない共同精神を、共同感情を殺す。そこでは芸術家、建築家、詩人は、希望のない個人主義を宣告される。」⁽⁹⁾ ローラント・ホルストにとって資本主義社会は、資本主義的生産・労働過程に包摂されることによって生活手段を確保する大衆から、この過程の他律的なリズムに同調させたり、この過程から排出して生活手段を奪ったりすることによって、個性を発達させ享受する能力と機会を奪う、それによって芸術家は、

個性的な作品を通じた創造と享受をめぐる共感の社会的な関係を奪われてしまうのである。

そこでローラント・ホルストは、個性を前提とした共同性の実現を社会主義に賭けた。『自伝』によれば、「社会主義の闘争は、あらゆる労働が尊敬され、全員がその才能を開花させて、兄弟としてともに生きることのできる新しい共同体のための闘争であって、これこそが、歳月を力と喜びで充たしてくれるはずの唯一の理想だった。」⁽¹⁰⁾

このように、ローラント・ホルストは、モリスを想わせるような美的・倫理的な関心から社会主義に向かった。個性的な創造と享受をめぐる共感の関係を、芸術活動のみならず、社会的な生産を含めた創造活動一般において確立すること、このようなものとして個性と共同性の調和をめざすことが、彼女にとって社会主義の究極的な目的であった。こうした社会主義観は、より深められながら生涯にわたって維持されることになる。ここを立脚点として、初期にはマルクス主義を受容し、晩年にはマルクス主義と対決するのである。

第2項 社会主義実現論としてのマルクス主義

初期のローラント・ホルストにおいて、美的・倫理的な社会主義とマルクス主義とが結びついたのは、一おそらく部分的には、夫を通じたモリスの影響にもよるのだろうが—『自伝』によれば、ホルテルの勧めで読んだ『資本論』が、「イギリス産業資本主義の犯罪的行為に対する激しい憤りと、労働者階級に対する深い同情によって胸に迫ってきた」からである。⁽¹¹⁾ こうした感動を与えたのは、『資本論』第1部第4篇「相対的剰余価値の生産」であった。彼女はそこをイギリス資本主義発生史として読み、とりわけ女性労働と児童労働に関する叙述に、オランダの工業化過程にも共通する資本主義の非人間的な側面に対する告発を見たのである。⁽¹²⁾

ローラント・ホルストは、このような歴史的、倫理的な読み方を通して、第1部第7編第24章「資本蓄積の歴史的傾向」を『資本論』の最後の言葉として捉え、そこで、資本主義から社会主義への移行の必然性が確証されていると信じた。『自伝』によれば、「私を熱狂させたのは、…労働者階級が抑圧と搾取に抗して立ち上がり、闘わねばならないという…マルクスとエンゲルスの揺るぎない確信であった。……資本主義的搾取が不断に強化されるところでは、また、たとえ労働者がなにがしかの改善を手

にしても、彼らと抑圧者との格差が不断に拡大するところでは、闘争はますます激化せざるをえない。そして、産業資本主義がより多くの産業分野と国家を支配すればするほど、つねにより広範で激烈な労働者の抵抗が生じるだろう。労働者階級は、政治権力を獲得して社会主義的生産を導入するまでは、勝利することはできない。私は、こうした見解のどこが真実で、どこが…自己欺瞞なのかを検討しようとはしなかった。」⁽¹³⁾

『自伝』のなかの自己批判的な文章のために極度に単純化されてはいるが、それだけに、資本主義の発展→階級闘争の激化→政治革命→社会主義的生産の導入という基本線は明らかである。ローラント・ホルストは、このように、社会主義実現手段の理論と実践としてマルクス主義を掴んだ。このようなマルクス主義は、実現されるべき未来社会像について、したがって、社会主義に賭ける価値についてなにも語らないマルクス主義である。この没価値的な装いに対する反省が及ばない限りで、ローラント・ホルストにおいて、マルクス主義は美的・倫理的な社会主義と同居しえたのである。たしかにローラント・ホルストは、マルクス主義者として成長するにつれて、実現手段としてのマルクス主義の理論や戦術を鍛え上げようとはしていく。また、自分が社会主義に期待する実現目的と手段としてのマルクス主義との関連も、たとえば、ヨーゼフ・ディーツゲンの哲学によるマルクス主義の補完を主張するといったかたちで、追究していく。しかしその場合でも、両者の同居という思想の構造そのものは不変だった。1910年になっても、彼女はこう書いている。「史的唯物論にとって、近代社会主義は、資本主義的生産と労働者階級との子供である。史的唯物論は、労働者階級の日々の闘争のなかに、醜く厭うべき現実からすばらしい夢の世界への、理想への道を、結線を、架け橋を見る。芸術家は人類の発展においてはじめて、愛と連帯の理想を、過剰な感情が生み出す表象や超自然的な世界への期待としてではなくて、生産の変革と労働者の日々の闘争から生じる自然の事実として、生成しつつある現実として捉えるのである。」⁽¹⁴⁾

しかしこのことは、ローラント・ホルストにおいて、マルクス主義が自己目的化されてはいなかったことをも示している。社会主義実現手段としてのマルクス主義は、美的・倫理的な目的によって制約されるのであり、さまざまな矛盾や対立をはらみながらも、この目的と一致する方向をとりうるときに、

はじめて正当化されるにすぎない。ぎゃくにいえば、こうした関係がもはや成立しないと判断されたとき、美的・倫理的社会主義とマルクス主義との同居という構造を自己批判することも含めて、マルクス主義との対決が開始されることになる。マルクス主義を相対化しうこうした社会主義思想によって、一それは、当時のローラント・ホルストの思想の構造的なまろさと一体となっているのだが一ローラント・ホルストにおけるマルクス主義との対決が準備されたのである。

註

- (1) オランダの工業化過程については、ローラント・ホルストの著作 *Kapitaal en arbeid in Nederland*, Deel 1, Amsterdam 1902, Deel 2, Amsterdam 1932 (4de verbeterden en met een 2de deel vermeerderde druk, Amsterdam 1977) が現在でも参考になる。邦語文献としては、簡略ではあるが、栗原福也『ベネルクス現代史』(山川出版、1982年)の該当箇所を参照せよ。
- (2) Vgl. Vos, H. de, *Geschiedenis van het socialisme in Nederland in het kader van zijn tijd*, Deel 1, Baarn 1976, blz. 123-124; Harmsen, G., *Nederlands kommunisme*, Nijmegen 1982, blz. 231-242.
- (3) Vgl. Roland Holst, H., *Het vuur brandde voort* (1949), 3de, uit nalatenschap van de auteur verbeterde druk, Amsterdam 1979, blz. 95-99.
- (4) Vgl. Harmsen, G., a.w., blz. 234.
- (5) Roland Holst, H., *Kapitaal en arbeid in Nederland*, Deel 1, a.w., blz. 215-216.
- (6) Vgl. Antonissen, R., a.w., blz. 132.
- (7) Idem, blz. 133.
- (8) Idem, blz. 137-138.
- (9) Roland Holst, H., *Het vuur brandde voort*, a.w., blz. 96-97.
- (10) Idem, blz. 97.
- (11) Idem, blz. 98.
- (12) Vgl. idem, blz. 98-99. ちなみに、女性の危険な労働と児童労働がオランダで法的に禁止されたのは、1889年のことである。ローラント・ホルストが『ネーデルラントにおける資本と労働』の第1部(218ページ)で、1869年の資料に基づいて挙げた数字では、レイデンの毛布工場では6歳から12歳の児童が1日18時間の労働をしており、ヒルフェルスムのカーベット産業では15-17時間働いていた。多くの場合、児童の労働時間は、正規の就業のほかに清掃や後片づけが加わるために成人より長かった。マー

ストリヒトでは、労働者家庭の7歳から12歳の児童の死亡率は、市民家庭の同年齢層の児童の死亡率の3-4倍であった。

- (13) Roland Holst, H., *Het vuur brandde voort*, a.w., blz. 99.
- (14) Ditto, *Josef Dietzgens Philosophie gemeinverständig erläutert in ihrer Bedeutung für das Proletariat*, München 1910, S. 89-90.

第2節 マルクス主義批判への道

第1項 SDAPの分裂

ローラント・ホルストがマルクス主義との対決を開始するのは、自分が社会主義に賭けてきた美的・倫理的的要求を、その実現手段として受容したはずのマルクス主義が阻害するのではないかと考えたからである。この疑問が、社会主義実現論としてのマルクス主義の思想構造そのものに向けられるのは、1928年になってからである。しかし、そうした発展への萌芽は、すでに、SDAPの党内対立が頂点に達した1909年頃から、党の体質に対する違和感という形で示されていた。

この党内対立の根本原因は、党の綱領的な立場と支持基盤との矛盾であった。SDAPは、綱領のうえでは、ドイツ社会民主党のエルフルト綱領と同一のマルクス主義を掲げていた。しかし彼らは、サンディカリストを支持する都市の産業労働者を捉えることはできず、北部農業諸州の小農や農業労働者を最大の支持基盤としていた。主流派のマルクス主義者と右派の改良主義者にとっては、党勢拡大のためには農民的利益の擁護が不可欠であった。1896年以降、オランダ経済が長期的な好況にはいると、彼らは、都市労働者へと支持を拡大すべく、議会を通した社会改良の推進に専念した。それに対して、左派のマルクス主義者は、SDAPが都市労働者を引きつけない原因を、オランダの後進性による労働者階級の未成熟に求めるとともに、綱領的マルクス主義の立場から、没落階級と位置づけられた農民階級の利益擁護を批判した。さらに20世紀にはいると、ベルギーのゼネストやオランダの交通スト、第一次ロシア革命などに強い印象をうけて、社会革命の時代が到来しつつあると確信し、革命に備える攻勢的な戦術を要求した。⁽¹⁾

ローラント・ホルストは、戦術的な立場としては左派に属していた。しかし、対立の経過それ自体に

は嫌悪感を感じざるをえなかった。前節の最後の引用が示しているように、彼女にとって社会主義の価値—この場合は、個性と共同性を媒介する連帯—は、それに反作用する現実の圧力にもかかわらず、日々の闘争のうちに予感されるものでなければならなかった。それこそが、政治生活に喜びを与えるのであった。しかし、彼女の支持する左派は、独自の機関誌を発行し、独自集会を開き、多数派工作を行うという、公然とした分派活動の道を選んだ。それと対決した主流派と右派は、左派を除名して異論を排除し、党の指導権を確保するという行政者的な態度をとった。⁽²⁾ ローラント・ホルストから見れば、見解の相違や対立、異論の発生は当たり前の事態にすぎない。この当たり前の事態が、権力闘争に転化し、権力闘争によって連帯が破壊されたのである。これは、社会主義政党自身が、社会主義の価値を裏切ることにはかならない。それにもかかわらず、両派ともその傷を反省することなく、分裂を正当化した。両派においては権力闘争が自己目的化され、そのために有効な手段ならすべてが許されたのである。⁽³⁾

1928年のローラント・ホルストなら、このような権力思考に、権力の獲得を自己目的化するマルクス主義的な社会主義実現論の帰結を見て厳しく批判するところだが、当時の彼女を襲ったのは心神の衰弱であった。彼女は、除名された左派が1909年に結成したオランダ社会民主党（SDP）にも参加せず、すべての役職を退いたかたちでSDAPにしばらくとどまったが、1911年には、いっさいの政治活動から身を引く決心をしてSDAPを離党した。

第2項 大戦経験

たしかに、ローラント・ホルストは、第一次大戦の衝撃を受けて政治生活に復帰する。1915年には、革命的な社会主義者同盟を結成して反戦運動に乗り出し、ツィンマーヴァルト会議にオランダを代表して参加した。1916年には、カール・ラデックの説得を受け容れてSDPに合流し、1918年にネーデルラント共産党と改称するこの政党に1927年までとどまることになる。しかし、この時期においても、SDAP時代に感じたマルクス主義に対する違和感と解消されはしなかった。ヨッホハイムも述べているように、マルクス主義に対する批判意識は、むしろこの時期に明確となったのである。⁽⁴⁾ その最大の契機が、大戦の経験であり、ボルシェヴィズムの実践であった。

ローラント・ホルストにとって第一次大戦は、戦争に対するほぼ全面的な熱狂と献身を、それまでの思想や立場の違いを越えて国民全体に引き起こすことによって、総力戦を遂行するのに必要な人的資源の調達と動員に成功した。それを基盤として生産力の軍事力への転用を押し進め、毒ガス兵器に代表される生物化学兵器の開発と使用によって、大量無差別殺戮の時代を開いた。⁽⁵⁾ 彼女がそこに見たのは、「あれこれの『思想』の力は、あらがいがたい力をもって無意識から生じる感情、気分、性向、激情に対しては無効である」ということだった。⁽⁶⁾ マルクス主義もおなじである。「マルクスが知らなかったし知りえなかったのは、人間の感情、意欲、行為に対する無意識の影響である。しかしわれわれは、マルクスが史的唯物論の基礎を提起してから、ほぼ半世紀後に生きているのだから、史的唯物論と現代心理学の成果とを調和させねばならない。今日の社会民主主義文献のほとんどが（暗黙のうちに）前提としているのは、意識的な行為にのみ影響を与えようということだが、これは少なくとも、現代の科学の水準から50年は遅れている。」⁽⁷⁾

ローラント・ホルストは、1915年にこのように述べて、心理学の成果に学びながら、無意識の層から発する人間の心の働きを捉えようとする立場を示している。それは、戦争への熱狂と、そこで解放された暴力への衝動の根源を突きとめる道であるとともに、それに対抗する可能性を人間の心の深層に探ろうとする道でもあった。「はじめに」で述べた宗教的社会主義は、このような対抗力を生命愛に求め、個性と共同性という価値を、それに拘束されるものとして基礎づけたときに成立する。

さらに戦術面では、反戦行動や社会変革において、暴力崇拝という時代の精神からの解放が主張される。1918年の『社会革命の闘争手段』によれば、「武器をもった暴力は、帝国主義大国が世界権力をめぐる闘争を戦い抜く手段であるが、これが、プロレタリアートの革命的前衛によって、主要な闘争手段として支持される危険がある。」⁽⁸⁾ たしかに「今日の帝国主義者階級にとっては…目的が手段を聖化するということは真理である。抑圧や搾取という悪い目的を実現するためなら、どんな手段も正しい。……しかしプロレタリアートの場合には、事情は違う。その目的は人類をひとつにし、連帯と自由の高みにのぼらせることである。プロレタリアートは、この目的と一致する手段によって、この目的の実現をめ

ざすときに、はじめて自分たちの力を発揮することができる。暴力や残虐行為は、有害な策謀（スパイ行為や買収）とともに、こうした手段には入らない。」⁽⁹⁾

そして、暴力崇拝から解放された闘争手段の強調とともに、個人の人格の尊厳が重視されてくる。たしかに大戦前のローラント・ホルストも、美的・倫理的価値として個性と共同性を強調してはいたが、前面に現れていたのは共同性であって、個性はその前提であった。しかし大戦中には、戦争と暴力から守られるべき価値として、また、戦争と暴力に対抗する価値として、個性を、それを基礎づける人格の尊厳というかたちで、共同性とならんで前面に押し出した。⁽¹⁰⁾ 戦争の時代の精神を、それに対抗するつもりで内面化してしまう危険を避けようとするれば、反戦行動や社会変革の過程においても、人格の尊厳が守られ、促進されねばならないのである。ローラント・ホルストは、1915年にこう書いている。「彼ら〔社会民主主義者〕は、大衆と個人の関係を十分に研究してこなかった。……われわれは、大衆が個人から成り立っていることを明確にしなければならない。」⁽¹¹⁾

このように、第一次大戦が勃発してからのローラント・ホルストは、合理主義的な行為観と暴力崇拝を批判し、人格の尊厳を強調するという立場を示していった。彼女にとって、目的合理性による手段の聖化は、すでにSDAPの党派闘争のなかで見られたことであったが、それに暴力崇拝が加わって、個人の人格の軽視を徹底的に押し進めたのが、1921年からネーデルラント共産党をも支配するようになったロシア共産党の態度であった。⁽¹²⁾

第3項 共産主義とモラル

その中でとくに問題だったのは、彼らのモラル観である。ローラント・ホルストは、1925年の『共産主義とモラル』でそれを批判している。

ヨッホハイムの整理にしたがえば、ローラント・ホルストにとって、当時の共産主義運動において支配的なモラル観の特徴は、第一に、政治行動の尺度を、党が理解する労働者階級にとっての効用に求める、という社会的功利主義である。第二に、この効用と、それを充足するための最適手段との関係が一義的に決定される、という社会的合理主義である。したがって第三に、モラルの問題が、階級闘争に関する戦略・戦術の科学に解消されるということであ

る。⁽¹³⁾

ローラント・ホルストにとって、このようなモラル観は、効用判断に基づく目的合理的行為を善とする点で、資本主義社会における合理的行為の規範と区別されない。それは、階級を構成する諸個人のあいだでの、また、諸個人の内部での行為の動機の多様性を掘めないという点で、そして、資本主義に代わる行為規範をもたないという点で、無力であった。

しかし、それにとどまらず有害なのは、階級利益の貫徹が自己目的化されている点である。既述のいくつかの引用で示したように、当時のローラント・ホルストにとって、人格の尊厳、個性、連帯、共同性といった人間全体にかかわる価値を実現することがもっとも重要な課題であった。社会主義の運動は、そうした価値を志向する限りで意味をもつ。ところが、のちにははっきりと述べるように、あらゆる社会主義がそうした価値の実現をめざすという保証はない。彼女にとっては、存在しない方がよい社会主義社会もありうる。⁽¹⁴⁾ 社会主義に賭けた価値と社会主義の運動や制度とは矛盾しうるのである。しかも、労働者階級が変革主体であるにしても、その階級利益という観点は、望ましい社会主義をめざすための可能な一手段にすぎない。階級利益がただちに社会主義につながるわけではないし、たとえつながったとしても、その社会主義が価値的に望ましいとも限らない。それゆえ、階級利益の立場から社会主義が志向されたとしても、「プロレタリア革命の経過のなかでは、『階級の声』と『人類の声』との衝突は避けがたいのである。」⁽¹⁵⁾ これはローラント・ホルストにとって、革命に対する熱狂と献身が、同時に敵の肉体的な殲滅をともなったロシア革命においても確認できることであった。この意味で、社会主義の目的と階級的な実現手段との関係は、一義的に決定されるものではない。「至高の目的と実現手段との内的な矛盾を自覚しなければならない。さらなる発展においてこの矛盾を解決する第一の条件が、この矛盾の悲劇的な性格を自覚するところにあるということ。を、学ばねばならない。闘争のなかで『強いられて』犯した反社会的な行為は…その動機がいかに純粹で気高いものであっても、不可避免的に精神のあり方に作用して、それを卑しめるということ。を自覚しなければならない。」⁽¹⁶⁾

こうしてモラルは、目的合理的な戦略・戦術の科学に解消されることはできず、独自の問題領域として存在することになる。それに対して、ロシア共産

党が支配する共産主義運動の主流は、社会変革をめざす行為の規範を階級利益に求め、その利益を社会主義の実現と等置し、その最適な実現手段を所与の条件のもとで科学的に確定できると考える。彼らにとっては、その実現手段に関して、ローラント・ホルストが重視するような道徳的な歯止めは存在しないし、そうした歯止めはむしろ不合理なものである。階級利益の貫徹が科学の名のもとに自己目的化されて、労働者階級を構成する個人も含めて、あらゆるものがこの目的の手段へと転化される。この目的のためには、ローラント・ホルストが批判するような暴力的衝動の解放や策謀を含めて、あらゆる手段が、その効果に応じて適用可能とされる。ローラント・ホルストにとっては、暴力革命から秘密細胞の建設に至る共産主義運動主流の実践を、こうしたモラル観が支えているのである。⁽¹⁷⁾

1928年の『統一への道』において明言しているように、ローラント・ホルストにとって、共産主義運動を支配する「ボルシェヴィキは…『人間にとって普遍的な』道徳上のいかなる要素も完全に退け、そうしたものに対する信仰を『ブルジョア的』思考の残滓とみなす。ロシア共産党にとっては、プロレタリア革命にもっぱら奉仕すること以外に、道徳は存在しない。勝利を促進するものはすべて善であり、阻害するものはすべて悪である。その結果、論理的には、なにが正しくてなにが非道徳的なのかという判断は、政治運動の指導者たちの手に委ねられることになる。道徳が政治的判断に従属する。……プロレタリア革命が残忍な行為や欺瞞によってその本質を傷つけられ、本来の目的から逸脱するのではないかという考えは、軽蔑とともに投げ捨てられる。……個人に対するテロを容認した社会革命黨員も、この方法を敵に用いることには問題があることを、つねに認めていた。公正と連帯を求めることと、この最終目的を追求するための手段が対立するという意識を、彼らは…隠れた傷としてもっていた。経済決定論者であるボルシェヴィキの場合は、もっと気楽である。彼らによれば、経済の発展が…プロレタリアートによる権力の行使と社会主義の導入に導いてくれるのである。彼らは、自分たち自身をも、もっぱら、この目的に奉仕する道具とみなす。……彼らは、人間を二種類に分ける。ひとつは、目的実現のために利用できる道具…であり、もうひとつは、目的実現を阻むものであって、これは無害にされるか排除されねばならない。」⁽¹⁸⁾

さらに、1932年の『ソヴィエト・ロシアにおける新しい文化の基礎と諸問題』によれば、「ボルシェヴィズムが形成しようとする社会秩序は、完全に自足的で合理的なものである。それを形成するためには、いかなる倫理的な個人主義も、すなわち、人格的な価値に対するいかなる敬意も根絶されねばならない。抽象的な人間を尊敬し崇拝する…ボルシェヴィズムは、現実のひとりひとりの個性的な人間には最小限の敬意も払わない。ひとりひとりの人間が大衆の一部をなすのなら、またその限りで、ボルシェヴィズムも、こうした個人を窮状から救おうとはする。しかし、ボルシェヴィズムは彼らを手段とみなすのであり、彼らが未来のユートピアという普遍的な目的を達成するうえで障害となる場合や、その可能性がある場合には、自分たちに彼らを放り出す権利があると考えている。……ボルシェヴィズムも、人間を主体として尊敬するのではなくて、手段として利用しようとする、ブルジョア的な非人間性に陥っているのである。」⁽¹⁹⁾

このように、ロシア共産党が支配する共産主義運動主流の立場は、ローラント・ホルストにとっては、反戦運動によって国際化する最初のきっかけを掴んだにもかかわらず、城内平和によって戦争体制に協力した社会民主主義運動の主流と同じく、そのモラル観によって戦争の時代に適応しているのであり、それに抗して守られるべき価値を破壊する可能性をもつのであった。1925年のローラント・ホルストは、この可能性が完全に現実化されているとは考えていなかった。プラーフによれば、その根拠は、トロツキーとその国際主義の存在であり、コミンテルンが国際主義の立場から主張する植民地・従属地域の民族解放闘争との連帯に、階級利益の貫徹という立場が相対化される可能性を見ていたことである。しかし1927年には、トロツキーの追放とコミンテルンの対中国共産党政策を見て失望し、ネーデルラント共産党を離党した。⁽²⁰⁾

ローラント・ホルストにとって、彼女自身が30年にわたってかかわってきたマルクス主義は、運動・制度あるいは体制へと定着したことによって、資本主義社会に代わる社会を形成する力を試されたにもかかわらず、この歴史の審問に耐えることができず、価値的に望ましい社会の可能性を示すことができなかったのである。以後のローラント・ホルストは、社会民主主義と共産主義というマルクス主義の二大運動を総括し、両者に共通する問題点を克服する道

を深ることによって、新たな解放思想を模索するのである。

註

- (1) Vgl. Roland Holst, *Kapitaal en arbeid in Nederland*, Deel 2, a.w., blz. 85-116; Wiessing, M. C., *Die holländische Schule des Marxismus. Die Tribunisten*, Hamburg 1980, S. 51-59.
- (2) Vgl. Roland Holst, H., *Het vuur brandde voort*, a.w., blz. 124-129.
- (3) Vgl. idem, blz. 125.
- (4) Vgl. Jochheim, G., a.a.O., S. 167-172, 177-181, 194-204 u. 351-355.
- (5) Vgl. Roland Holst, H., *De weg tot eenheid*, Amsterdam 1928, blz. 162-163; *Der Umschwung in der geistigen Lage und die neuen Aufgaben des Sozialismus*, Zürich 1930, S. 31.
- (6) Ditto, *Nogmals: volksleger of ontwapening*, in: *De Nieuwe Tijd*, 20. Jg.(1915), blz. 155.
- (7) Idem, blz. 154.
- (8) Ditto, *De strijdmiddelen der sociale revolutie*, Amsterdam 1918, blz. 38.
- (9) Idem, blz. 50.
- (10) Vgl. Jochheim, a.a., S. 179-181.
- (11) Roland Holst, H., *Waarom ook sociaal-demokraten het manifest-van-sympathie met eventuelle dienstweigeraars getekend hebben*, in: *De Tribune*, Nr. 6(1915), blz. 100.
- (12) Vgl. Wiessing, M. C., a.a.O., S. 24-50 u. 88-130; Harmsen, G., a.w., blz. 243-249. ローラント・ホルストは、第2回国際共産主義婦人会議とコミンテルン第3回大会に出席するため、1921年にモスクワを訪れたが、そのときの見聞が彼女のロシア共産主義批判に大きな影響を及ぼしたようである。『自伝』によれば、彼女はそこで、バラバーノフに会ってコミンテルン指導部の内情を聞き、コロンタイからはクロンシュタット蜂起の真相を教えられ、トロツキーのメモワールの整理を手伝って、その内容を広言しないように口止めされ、ゴークキーにはロシアの飢餓の状況を説明されて救援を訴えられている。(Vgl. Roland Holst, H., *Het vuur brandde voort*, a.w., blz. 193-204.)
- (13) Vgl. Jochheim, G., a.a.O., S. 352.
- (14) 『統一への道』において、ローラント・ホルストはこう述べている。「テロリズム、死刑、人質の処刑を自己保存のために必要とするような社会主義、スパイや挑発者

の利用を資本主義国家と競うような社会主義なら、ない方がましだ。」(Roland Holst, H., *De weg tot eenheid*, a.w., blz. 156.)

- (15) Roland Holst, H., *Communisme en moraal*, Arnhem 1925, blz. 142.
- (16) Idem, blz. 149.
- (17) Vgl. idem, blz. 169.
- (18) Ditto, *De weg tot eenheid*, a.w., blz. 53.
- (19) Ditto, *Grondslagen en problemen der nieuwe kultuur in Sowjet-Rusland*, Amsterdam 1932, blz. 56.
- (20) Vgl. Praag, J. P. van, a.w., blz. 33.

第3節 ローラント・ホルストにおけるマルクス主義との対決

第1項 マルクス主義批判の論点

ローラント・ホルストがマルクス主義との対決を開始したのは、1928年の著作『統一への道』においてである。当時の彼女にとっては、マルクス主義は純粋に経済学的な認識としては、なお妥当性をもっていた。彼女自身も、1932年に刊行した『ネーデルラントにおける資本と労働』の第2部において、下部構造決定論は退けているものの、諸帝国主義論の知見をオランダ資本主義分析に援用している。⁽¹⁾ また、社会変革に労働者が参加すべきだという観点、共同体の機関による生産手段の共同管理という社会主義社会像、階級の廃絶という共産主義像も、ローラント・ホルストは、マルクス主義を含めた諸社会主義の遺産として承認している。⁽²⁾ しかし、その資本主義認識から帰結するとされる社会主義実現論としてのマルクス主義は、もはや妥当性をもたなかった。

ローラント・ホルストによれば、さまざまなヴァリエーションはあるものの、社会民主主義運動と共産主義運動というマルクス主義の二大運動に共通する社会主義実現論の特徴は、第一に、自分たちの発見した一定の法則にしたがって社会が発展し、社会主義を必然的にもたらす、という歴史法則主義を信仰していることである。もちろん、人間の介入がなくても社会主義が実現されるわけではないので、この場合の必然性には、社会主義をめざす意識と行動が、この社会発展のもとで潜在的であれ顕在的であれ生じるはずだ、という確信も含まれている。このような意識と行動の決定要因として重視されるのが経済であり、したがって第二の特徴は、経済的動機

が人間を駆り立てる最強の力であり、経済的利害が社会の最強の動因であるという経済主義である。そして第三の特徴は、経済的利害に発する社会主義闘争が、組織的、政治的あるいは軍事的な権力手段を所有するか否かで決着のつく、国家権力をめぐる闘争に集約されるという政治主義である。⁽³⁾

第2項 歴史法則主義批判

まず歴史法則主義についていえば、それは周知のように、資本主義の生産力的発展が社会主義の生産力基盤を準備するという命題と、生産力の発展と資本主義の生産関係の矛盾が社会主義を必然化するという命題によって構成されている。

ローラント・ホルストにとって、第一に、社会主義の生産力基盤としてマルクス主義者が期待する資本主義の生産力の発展は、無条件に賛美できるものではなかった。本稿の第1節で述べたように、ローラント・ホルストはきわめて早い時期から、自然破壊や景観破壊というかたちで、生産力の発展がもたらす破壊作用を見ていたが、こうした立場は大战後にはさらに強まる。『ソヴィエト・ロシアにおける新しい文化の基礎と諸問題』によれば、資本主義の生産力の発展は、ウェーバーが捉えていたように、機械化・合理化・専門家・集権化を推し進め、それらを総括する官僚制を発展させることによって、人格の個性的な発達を阻害し、人間のあらゆる自発的な力を抑圧して、人間の目的と生を合理化してしまう。したがって生産力の発展は、形態転換を遂げない限り、価値的に望ましい社会主義を準備しない。逆にレーニンが一国一工場モデルで構想したように、資本主義的企業の合理的組織をモデルに国民経済の全体を編成するとすれば、それは資本主義的生産力の抑圧構造を全面化することにほかならない。⁽⁴⁾ 「社会主義を、まず人間的自由の理想と捉えるならば、将来における生産・生活形態の完全な合理化を熱烈に歓迎するというわけにはいかない。……そのような合理化を人類が生の実の喜びとして、実の充足として享受することができるとすれば、そこで前提とされているのは、人間の存在様式のきわめて深い変化であるが、それをわれわれは想像することすらできない。」⁽⁵⁾

第二に、生産力と生産関係の矛盾という命題については、ローラント・ホルストが、それを社会変動の一般理論としてどこまで承認しているのか、あるいは承認していないのかは判然としない。しかし少

なくとも、彼女にとっては、この矛盾が顕在化したとしても、それは必ずしも社会主義を志向する行為の動因とはならない、というのは、人間の心に対する外的要因の作用は、いかなるものであれ、人間の内的諸力によって促進されることも、修正されることも、抵抗を受けることもあるからである。⁽⁶⁾

しかも、『ネーデルラントにおける資本と労働』の第2部によれば、後発資本主義国であったオランダにおいてさえ、1896年から大恐慌まで続いた長期的な上昇局面において、大衆民主主義と労働運動の発展や社会改良の進行、映画・ラジオなどの大衆的な文化装置の発展を背景として、労働者の健康・生活・文化・教育水準の全般的な向上が達成された。服装・住宅・食事・娯楽などに関する日常生活上の欲求水準や達成水準においても、労働者の上層と中産階級や知識人の一部とのあいだに、格差はほとんど存在しなくなった。政治・教育・科学・文化などの領域では、労働者家庭の出身者が指導的なエリートに上昇転化する道も開かれた。ローラント・ホルストにとっても、ヘンドリック・ド・マンが指摘したように、労働者階級の市民化が、生活様式と生活意識の両面で進行したのである。⁽⁷⁾ ローラント・ホルストにとって、このような労働者の意志は、「合理的な思考や感情に駆られている限り、自分のために何かをすること、つまり、一定の害を避けたり、利益となることを行ったりすることに堅く結びついている。」⁽⁸⁾ このようにローラント・ホルストにとって、西ヨーロッパ資本主義諸国の労働者は、意識の領域では、資本主義的な計算合理性を内面化しているのである。したがって、たとえ生産力と生産関係の矛盾が目に見えるかたちで現れたとしても、それが彼らの合理的な意識にしか届かなければ、彼らが、「現在の確実な利益を将来の不確実な利益の犠牲にして」社会主義に賭けることは、ほとんど期待できない。⁽⁹⁾

こうして、資本主義の生産力的な発展は、社会主義を準備することも必然化することもない。資本主義の経済的な発展を無視することはできないにしても、そこに社会主義の根拠を求めることもできない。この意味で、「そもそも社会発展には、一定の発展系列の『終わり』、すなわち絶対的な終点はない。反対に、…『相対的な終点』が、時代のある均衡状態から別の均衡状態への移行が、過渡期があるのみである。」⁽¹⁰⁾

第3項 経済主義批判

以上のような歴史法則主義批判からすれば、社会主義に向かう社会と行為の最強の動因を経済に求めるというマルクス主義の命題も、無力である。ローラント・ホルストにとってとくに問題なのは、労働者の行為を経済的な獲得動機で捉えようとする態度である。

ローラント・ホルストにとって、この態度の背景にあるのは、マルクス主義の労働者像が、1840-50年代の労働者を素材にして形成されたという事情である。この時代の労働者は、貧困からの脱出を最大の生活課題としていたにもかかわらず、市民社会の政治・社会生活からほとんど完全に閉め出された、無権利状態におかれていた。⁽¹¹⁾ こうした労働者にとっては、経済的な利害関心が、資本主義とは異なる社会を志向する動機となりうる。その限りで、「階級利益のためのプロレタリアートの闘争は、…最終目的と、すなわち、社会主義的な共同体をめざす闘争と一致していた、……なぜなら、労働者がその時代の社会になにも期待できず、なにも失うものがないのなら、彼らの闘争は、もうひとつの社会をめざす闘争として遂行されることができるからである。」⁽¹²⁾

しかし西ヨーロッパ資本主義諸国では、19世紀の末には事情は変わった。西ヨーロッパ資本主義諸国は、労働者の集団的な利益要求を社会の制度的な与件として承認し、彼らに労働権や参政権をある程度は与えて、巨大化した生産力と大不況期以後の順調な経済成長を背景にして、社会改良の働きかけに応じることができるようになった。この段階では『マルクス主義者』と『改良主義者』の長い…論争で明らかになったように、労働者階級の直接的な『利益』をめざす闘争は…社会主義の『最終目的』をめざす闘争とはもはや一致しない。当時、すべての修正主義者と改良主義者は、最終目的はいつでもよく、運動が、つまり、一定の具体的な目的のための運動がすべてであると誠実に認めた。⁽¹³⁾ これに対してマルクス主義者は、一時的な利益と永続的な利益、集団利益と階級利益、即自的利益と対自的利益を区別するところに脱出路を見出そうとした。しかしそれは、ローラント・ホルストから見れば、労働者の利害計算に訴えるという点では、改良主義者と同じなのであり、訴える利益が未来の社会主義という抽象的で不確実なものである点で、改良主義

者に比べてはるかに弱い訴求力しかもちえなかったのである。ぎゃくに「社会民主党の活動領域は、…改良主義の方法によって拡大した。多くの活動的・知的・野心的な部分が、…この方法によって、自分の能力を十分に発揮して課題を遂行する機会を獲得した。それが、自尊心という本能を満足させ、充実感を与えた。もちろん、物質的な条件の追求—高い給与や安定した地位—も、少なからぬ役割を果たした。これに対して教条的なマルクス主義は、市民社会への責任あるかわりを促すような…動機を満足させることができなかった。それゆえ、知的能力に恵まれた行動的な社会民主党活動家の多くが…改良主義に向かったことは、驚くにあたらない。」⁽¹⁴⁾

ローラント・ホルストによれば、西ヨーロッパ資本主義において、ひとが社会主義という不確実な未来に賭けるとすれば、それは利害計算の結果としてではなくて、利害計算にもかかわらずそうするのである。「労働者運動の最も強力な動因は、資本主義社会とは原理的に異なった、よりよい世界への労働者の熱望と意志である。すなわち、誰も他人の手段とはならない公正な社会秩序への熱望、公正という昔からの夢を実現するために闘い、耐える意志である。このような熱望と意志が、根源的な社会主義的信条を作り上げるのであって、これこそが、労働者運動の革新と再生の出発点でなければならない。」⁽¹⁵⁾ この公正感情をさらに基礎づけているのは、ローラント・ホルストによれば、西ヨーロッパ市民文化が育んできた人格の尊厳という価値感情である。⁽¹⁶⁾ 「社会的な自由と平等という理念を、西ヨーロッパの労働者運動は、これまで以上の個性性の享受と結びつけている。労働条件の改善や生活水準の向上は、最も粗野で無知な労働者のなかにも眠っている個人の固有の価値感情のためにこそ、追求されるのである。西ヨーロッパの大衆が選挙権闘争を闘ったのも、まさに、最初から意識されてはいなかったにしろ、この権利が自分たちの階級のものになるからというだけではなくて、彼らが選挙権を自己の固有の人間存在に基づいて要求したからである。……西ヨーロッパの社会主義においては、大衆の統一、大衆の力、大衆の連帯、大衆の規律といった感情は、個人の価値、個人の権利の尊厳という意識によってたえず制限される。この強力な個性性が、…一定の状況ではひとりでも立ち上がる勇気を与えているのである。」⁽¹⁷⁾

ローラント・ホルストにとって、自己の人格に対

するこのような価値評価は、資本主義的な計算合理性の背景にも存在する。しかしその支配のもとでは、人間は互いに、他者を自己の生存と福祉の手段としあうのであり、その結果、人格の尊厳という感情は他者の人格への敬意へと展開されることができず、相互破壊の危険にさらされる。そこで要請されるのが、本稿の「はじめに」で述べた生命愛である。この生命愛は、純粋に貫かれることは期待できないものであるが、その現れにおいて多様で弱々しいものであったとしても、ローラント・ホルストにとっては、人間の心の中に生きる志向のひとつである。それは、のちにフロムが彼女と重なる問題意識から展開したように、資本主義的合理性によって抑圧はされるが、滅ぼされることはない。そして、人間学的な意味での生が、抽象化・定量化・合理的制御を完全には許さない個における多様性と流動性のうちにある以上、生命に対する愛は、他の生を自分に了解・操作可能なものへと還元して捉えるのではなく、その多様性と流動性そのものを肯定するという姿勢と結びつかざるをえない。ローラント・ホルストは、生命愛が本来的にもつこうした傾向のもとに、人格の尊厳という価値感情を捉え込むことによって、それを他者の人格に対する敬意へと発展させ、西ヨーロッパ市民文化の遺産である個人主義の気質を共同体的なものに織り込もうと考えた。⁽¹⁸⁾ こうすることによって、自分が他人の手段となることも、自分が他人を手段とすることも、他人が他人を手段とすることも価値的に容認しえないという社会感情を強化し、そうした社会感情により適合した生活諸関係の形成を追求するところに、社会主義的な行為の源泉を見ようとしたのである。

第4項 政治主義批判

このような社会主義のイメージからすれば、マルクス主義の政治闘争至上主義も批判されざるをえない。

ローラント・ホルストによれば、「マルクス主義は、社会主義の理想ではなくてプロレタリアートの利益を、すべての人間にとってのよりいっそうの生の喜びや幸福ではなくて、権力闘争を重視する。マルクス主義は、階級利益のために闘争を遂行し、その闘争意志を権力の行使に向けることがもっとも重要だと労働者階級に教え込む。それによれば、ひとたび闘争に勝利して権力を獲得すれば、社会主義の理想というもうひとつの結果も、ひとりでに生じる

はずであった。労働者階級が、独裁的な権限をもって社会主義を土台とする社会を建設するはずであった。短い過渡期のあとには、階級が国家とともに消滅し、『自由な生産者のアソシエーション』が生まれるはずであった。」⁽¹⁹⁾

このようにローラント・ホルストにとって、マルクス主義は、労働者階級の階級利益→政治闘争→社会主義の理想を、それらの内容に関する理解は多様であるにしても、政治闘争を結節点とする一連の過程として掴む。ローラント・ホルストは、階級利益の立場から政治闘争が行われることは、それが価値的に望ましい目的を追求するかどうかはともかくとして、事実としては承認する。それに対して、彼女にとって問題なのは、既存の国家権力の継承であれ、新しい国家権力の樹立であれ、権力の獲得と社会主義の理想の実現とが直結されていることである。当時の彼女にとっては、権力の獲得は社会主義の理想と直接の関連はない。権力の獲得によって、労働者が自分たちの階級的あるいは集団的利益を優先的に追求し実現できる機会を得たとしても、だからといって、階級と階級支配の消滅に向けて、彼らがその特権的な地位を放棄するという保証はどこにもない。むしろ、「権力獲得後に、新しい支配集団が…労働者階級のなかから生まれる可能性もある。」⁽²⁰⁾

それにもかかわらず、階級利益に始まり社会主義の理想で終わる過程が成り立つとすれば、それはローラント・ホルストにとっては、利益計算に基づいて行動してきた人間が、権力を獲得した暁には、一強制的か自発的かは別として一理想の実現をめざす人間に生まれ変わるという、価値感情の非現実的な変化を想定する場合だけである。⁽²¹⁾ そして、このような変化を暗黙のうちにはあれ想定する限りでは、議会主義や暴力主義といった闘争形態の選択を含めて、権力の獲得にとって最適な行動体系を選択することが、社会主義を実現するための最も必要で合理的な前提条件だということになる。その結果、権力の獲得が自己目的化されてしまう。⁽²²⁾ すでに第2節第3項で見たように、こうした発想の最も非人間的な帰結を示したのが、ローラント・ホルストにとってはボルシェヴィズムの実践であった。

ローラント・ホルストにとっては、権力の獲得は、社会主義を実現するための可能な一条件にすぎない。もうひとつの条件が、本節第3項で示したような、人間による人間の手段化を容認しえないという価値感情を強化することであった。この立場からすれば、

社会主義をめざす運動は、権力獲得に対する合目的性のみを尺度として一元的に整序されるべきではなくて、同時に、運動参加者の価値感情に対する作用をも考慮して行われねばならない。

「社会主義は、…社会的性向の強化から、公正への衝動と人間愛からのみ成長することができる。労働者階級が『勝利の暁』に社会主義的に行動できるとすれば、その成員自身が、それ以前に共同体的な人間へと教育されていなければならない。そうだとすれば、闘争手段と闘争方法は、まずもって、闘争者自身に対するその作用によって評価されねばならない。闘争者の非社会的、反社会的な性向を強めて、嘘、偽善、粗野、暴力、個人の軽視を育むようなすべての闘争手段は、目的に合わない不当なものであるとみなされねばならない。というのは、こうした闘争手段は、社会主義に向けて社会を発展させるためのもっとも重要な心理的前提条件となる、一般的な精神構造の完成を阻むからである。このような闘争手段を完全に退けることが今日では…不可能であるにしても、他のいかなる手段も役に立たないという条件のもとで、不可避免的にそうした手段の利用を強制されたとき以外に、それを利用しないということとはできる。……改良主義の政策において日常茶飯事となっている政治的な裏工作や不正も、欺瞞と暴力のうえに築かれた共産主義の戦術も、労働者階級と社会主義にふさわしいものではなく、それらを傷つけるものであるという思想を、労働者階級に浸透させねばならない。」⁽²³⁾

ローラント・ホルストは、この問題意識に基づいて、1920年代の末から、新しい運動論の形成に向かった。トルソーに終わったその試みの特徴は、一言でいうと、人間による人間の手段化を正統化し促進するような制度や関係を克服する無限の運動として、社会主義を捉えるというものである。それは具体的には、帝国主義、軍国主義、植民地主義、人種の抑圧とファシズムに反対し、生活の安定と政治的・経済的な共同決定を推進しようとするものである。その手段としては、言論・集会・マスメディアなど、世論の形成に影響を与える通常的手段や、議会活動が承認される。さらに、人権と自由が脅かされるような社会の緊張状態においては、ストライキ、ボイコット、新たな社会的機関の創設といった手段も承認される。⁽²⁴⁾ これらの点では、ローラント・ホルストにさほどの独創性はない。マルクス主義を含めた社会主義の多くと、共通点をもっている。

しかし、社会民主主義や共産主義の主流と決定的に異なるのは、前述の目標を前述の手段で追求する過程においても、人格の尊厳が守られ、人間による人間の手段化を嫌悪する価値感情が発展させられねばならない、とする点である。

その条件としてローラント・ホルストが重視するのは、第一に、暴力の使用を完全に避けることは不可能だとしても、暴力主義は原則的に拒否することである。彼女にとって、ロシア革命が示しているように、暴力は、和解よりも対立の深化をもたらす危険をつねに秘めている。暴力の使用が新たな暴力の呼び水となり、暴力が拡大再生産されれば、暴力を行使する者や暴力を受けた者だけでなく、それを取り巻く者たちの精神の荒廃も進むことになるのである。⁽²⁵⁾

第二の条件は、社会主義思想の多様性を承認することである。彼女にとって、社会主義的信条は、科学的な認識の結果としてえられるものでも、社会発展によって、そうした信条が形成される客観的な基盤が与えられるものでもない。諸個人は、外部の作用を受けながらも、多様な内面的動機によって自分の社会主義的信条を形成することができる。この意味で、さまざまな社会主義思想は、等価とみなされねばならない。思想の争いは、政治に従属すべきではなく、組織権力をめぐる権力闘争として行われてはならない。むしろ、それぞれの思想の支持者たちがお互いに確信をえるための、思想闘争として行われるべきであり、その闘争に際しては完全な自由が保障されねばならない。⁽²⁶⁾

したがって第三に、組織と組織、組織と個人の関係についても、集権主義ではなくて、連合主義の原理が採用されるべきである。たしかに、目標については、運動に参加する個人や組織に統一がなければならない。しかし、目標を追求する手段に関しては、暴力主義や権力主義の排除といった限定はあるものの、組織や個人に大幅な自由裁量が認められねばならない。⁽²⁷⁾

第四の、ローラント・ホルストにとってもっとも重要な条件は、日常の生活感情のレベルで、人格の尊厳を守ろうとする心情を強化するように働きかけることである。風俗習慣を含めた生活の質やスタイルのレベルで、資本主義的な計算合理性や人格の手段化をできるだけ免れた生き方を追求することである。このような下からの感情的な支えがなければ、第一から第三の条件は、社会的な広がりをもつもの

註

としては成立しない。この第四の条件を成熟させていくためには、生活を直接に取り巻く社会環境や、教育学的・心理学的な意味での社会化過程において、人格の尊厳を育むような制度が形成されるように、働きかけねばならない。彼女が、その具体例として挙げているのは、消費者協同組合、地方自治制度の充実、学校制度の改革などである。⁽²⁸⁾

この意味で、ローラント・ホルストにとって、社会主義運動に対する評価は、改良主義や修正主義の場合と同じく、「運動におけるいわゆる『小さな仕事』に向けられるのであって、われわれは、ほとんど注目されない変化によって、労働者の人間的個性を解放しようとするのである。」⁽²⁹⁾ しかし、こうした働きかけを直接に受けとめる者や、みずからこのように働きかける者は、改良主義や修正主義の場合とは違って、階級的あるいは集団的な利益のために結集した労働者ではない。ローラント・ホルストにとって、西ヨーロッパ資本主義のもとでの労働者は、すでに、このような働きかけに直接には応えないほど資本主義的な計算合理性に囚われ、植民地支配に代表されるような、人間による人間の手段化を自分たちの生活条件としているのである。⁽³⁰⁾ それに代わって、ローラント・ホルストがわずかな期待を寄せるのは、階級的あるいは集団的利益に対して労働者よりは距離がある女性と青年の運動であった。⁽³¹⁾

こうして、ローラント・ホルストの社会主義においては、社会主義の必然性は否定され、階級利益と階級的政治闘争至上主義の妥当性も否定される。権力論、所有論、生産関係論は否定はされないものの、運動の基本的な尺度としての地位は失う。それに代わって、女性や青年に担われた、生活過程における諸関係を人間化しようとする運動が、社会主義運動の前面に現れる。この意味で、ローラント・ホルストにおいては、社会主義という伝統的な名称がなお用いられているとはいえ、その運動のイメージは、生活様式の転換を志向する市民運動のそれに近い。ローラント・ホルストは、マルクス主義に代わって、人格の尊厳を求める市民運動の方向に、生涯にわたって掲げてきた美的・倫理的価値を実現する道を見出そうとしたのである。

この点で、ローラント・ホルストの思想は、19世紀資本主義が生んだ社会主義の立場から、20世紀後半にいたって展開される市民運動の立場への過渡期の思想と位置づけることができる。

- (1) Vgl. Roland Holst, H., *Kapitaal en arbeid in Nederland*, Deel 2, a.w., blz. 1.
- (2) Vgl. ditto, *De weg tot eenheid*, a.w., blz. 138-139.
- (3) Vgl. idem, blz. 137-138.
- (4) Vgl. ditto, *Grondslagen en problemen der nieuwe kultuur in Sowjet-Rusland*, a.w., blz. 65-68 en 98-101.
- (5) Ditto, *De weg tot eenheid*, a.w., blz. 181-182.
- (6) Vgl. ditto, *Der Umschwung in der geistigen Lage und die neuen Aufgaben des Sozialismus*, a.a.O., S. 26-27.
- (7) Vgl. ditto, *Kapitaal en arbeid in Nederland*, Deel 2, a.w., blz. 265-270.
- (8) Ditto, *De weg tot eenheid*, a.w., blz. 144.
- (9) Idem, blz. 146.
- (10) Ditto, *Der Umschwung in der geistigen Lage und die neuen Aufgaben des Sozialismus*, a.a.O., S. 33.
- (11) Vgl. ditto, *De weg tot eenheid*, a.w., blz. 140-142.
- (12) Idem, blz. 142.
- (13) Idem, blz. 143.
- (14) Idem, blz. 38.
- (15) Vgl. idem, blz. 132.
- (16) Idem, blz. 133.
- (17) Vgl. idem, blz. 133.
- (18) Vgl. Roland Holst, H., *De weg tot eenheid*, a.w., blz. 133.
- (19) Idem, blz. 141-142.
- (20) Idem, blz. 151.
- (21) Vgl. idem, blz. 151-153.
- (22) Vgl. idem, blz. 158.
- (23) Idem, blz. 152-153.
- (24) Vgl. idem, blz. 174.
- (25) Vgl. Jochheim, G., a.a.O., S. 368-371.
- (26) Vgl. Roland Holst, H., *De weg tot eenheid*, a.w., blz. 174-175.
- (27) Vgl. idem, blz. 174.
- (28) Vgl. Jochheim, G., a.a.O., S. 371-372.
- (29) Roland Holst, H., *De weg tot eenheid*, a.w., blz. 180.
- (30) Vgl. idem, blz. 19-20.
- (31) Vgl. Jochheim, G., a.a.O., S. 363-364.

小 括

マルクス主義は、資本主義経済の革新的な力を信頼する思想である。マルクス主義にとって、資本主義経済は、非資本主義的な関係や領域を破壊して自己の再生産圏に組み込むとともに、自己自身を破壊して新しい歴史を生むダイナミズムを、それ自身のうちに備えている。ローラント・ホルストがマルクス主義を信じた理由も、マルクス主義と対決した理由も、基本的には、マルクス主義のこうした思想的特性に求めることができる。

彼女にとって産業資本主義は、2世紀にわたるオランダ社会の沈滞を破る起爆力を備えていた。しかも、1870年代に本格的な工業化を開始してからわずか四半世紀で、オランダを大衆社会の入り口にまでもたす力も示した。マルクス主義は、彼女にとって、資本主義のこのような抗いがたい力を説明してくれるとともに、美的・倫理的に許容しえないその発展からの脱出路も、資本主義経済システムの内部に示してくれたのであった。

しかし、資本主義経済の内部にそれを越える力を見ようとしたマルクス主義は、ローラント・ホルストにとって、その発想そのものによって、ぎゃくに隘路に陥ったのである。彼女にとって、それを示していたのが、第一に、生産力の解放的な性格を強調したことである。第二に、その生活条件によって資本主義的な計算合理性を内面化する労働者を、資本

主義に対抗する階級利益の担い手と捉えたことである。第三に、この階級利益に最適な目的合理的行為によって、それは形式的には資本主義的企業の合理的な経営活動と区別されないにもかかわらず、社会主義を実現できると信じた点である。

このようなマルクス主義に代わって、彼女が依拠しようとしたのは、西ヨーロッパにおいては、人格の尊厳という価値を標榜する市民運動的な生活形態の転換であった。こうした立場は、たしかに、当時よりも現代においてアクチュアルではある。しかし、経済学的・社会科学的な素養をもたなかったローラント・ホルストにあっては、このような人格的な価値が資本主義的な経済システムにおいていかに抑圧され変形されているのか、それにもかかわらず、その価値が展開される可能性はどこにあるのか、という分析が決定的に弱い。人格の尊厳の背景に生命愛をおくという着想はあるものの、それをフロムのように、社会思想的に展開することもできなかった。むしろ、最晩年のローラント・ホルストが熱心に取り組んだのは、詩人としての芸術表現を通して、生命愛を訴えるという行為であった。

それゆえローラント・ホルストは、きわめて早い時期にマルクス主義の限界を捉え、19世紀的社会主義から20世紀的市民運動論への展開の先駆をなしたとしても、忘れられた存在にとどまったのである。

(1995年10月 脱稿)